

# 隠岐島五箇方言の「ゴザル」について

神 部 宏 泰

隠岐島「島後」の西北端に位置する五箇村の生活語は、比較的古態を示しがちで注目される。いま、この生活語を五箇方言として把握する。

五箇方言では、「ゴザル」がさかんにおこなわれている。本稿では、この「ゴザル」の存立状態について述べてみようと思う。

「ゴザル」が「マス」と結託して「ゴザイマス」となったものは、共通語にもおこなわれているが、それは、だいたい、「有る」の意義のものであるといえる。

「ゴザル」は、元來、「居る・有る・行く・来る」の意義でおこなわれていたものであるが、今日、「ゴザル」のみられる諸方言で、この四種の意義でおこなわれることはかなり少なくなっているようである。五箇方言でも、右の四種の意義全部でもってはおこなわれていない。が、そのうち、「居る・有る・来る」の意義のことばとしてはさかんな活動力を持ち、各活用形もそなわっている。

以下、このような「ゴザル」について、昭和三十二年四月から同

三十四年八月までの、延べ四十四日間にわたる現地での観察に基づき、記述を試みよう。

## 二

(1) 「居る」の意義の「ゴザル」をみよう。

○パイサンワ オチニゴザル カノ。

おばあさんはうちにいらっしやるかね。(老女↓同)

○イキテ ミマシユー。 オチニゴザルヂャト オモイマスケー。

行っごらんなさい。うちにいらっしやると思ひますか  
ら。(老男)

○ソノヤニ ニンゲンゴザランヂャネーカ。

その家に人間はいられないではないか。(中男↓中女)

○ワシトジキソバニゴザツタ。

私のすぐそばにいらっしやった。(中女↓老女)

このようにおこなわれている。これらは、主として中年以上、それも、老人によってもちいられることの多いものようである。概して、高位の敬意を示すものといえる。

○フエーカガ ゴザル トコモ、ワカッテ、コッタエド。

陛下がいらっしゃるところもわかつていたけれど。(老男)

↓青男)

この例では、「ゴザル」が、「陛下」についてもさいられている。これからしても、「ゴザル」のもつ敬意が、そうとうに高いものであることを観察することができるのである。

(2) 「有る」の意義の「ゴザル」は次下のようにおこなわれている。

○ヤマニ マツノ、キガ ゴザル。

山に松の木があります。(老男)

○オーキナ オミヤノ ゴザル、ズツト サキデスケー。

大きなお宮のあります、そのずっとさきですから。(老男)

○ヤネカラ オタケサシタ コトガ ゴザル ダ。

屋根から叫ばれたことがありますよ。(老男)

これらの例にみられる終止形とか、あるいはまた、

○ムカシャー アゲナ コト スツ トキガ アリョウッタ

コトガ ゴザッタエド シカラエルケー。

昔はあんなことをするときがありましたけれど、今する

と叱られるから。(老女)

この例にみられる「ゴザッタエド」のような、連用形が完了の助動詞「タ」を伴った、いわゆる「完了態」などがよくもちいられている。一方、

○コマツチヨル モノー コロス、トコロデワ ゴザラヌ。

生活に困っている者を殺すところではありません。(老男)

男)

○ドージエンノヨーナ、コター ゴザラヌ ワ。

「鳥前」のようなことはありませんわ。(老男)

この例の「ゴザラヌ」のようないわゆる「否定態」も、もちいられることの多いものである。

○テンポ オーケナ コトモ ゴザラヌ。リョーフネダケノ

1。おごく大きなこともありません。漁船だからねえ。(老女)

それで、ほんとに、二度とそんなことはありません。(老女)

○ソエデ ケー ニドト ソゲナ コト ゴザラヌ。

このように、「否定態」では打消の助動詞「ヌ」をとるのが普通である。この「ヌ」も、 $[k d s]$  などのような破裂音、あるいは破裂音に続く場合は、

女)

○ソリヤー マチガイ ゴザランケー。

それはまちがいありませんから。(老男)

○アブナゲガ ゴザランダケ

あぶなげがありませんがねえ。(老女)

○アンマリ ゴザラン チヤ。

あまりありませんよ。(老男)

これらの例のように、「ン」と実現するのが普通のようなのである。

(3) 「来る」の意義の「ゴザル」をみよう。これは、

この例にみられる「ゴザッタエド」のような、連用形が完了の助動詞「タ」を伴った、いわゆる「完了態」などがよくもちいられている。一方、

「来る」の意義の「ゴザル」をみよう。これは、

○フトガ ノトロニ ゴザル。

人がひっきりなしにいらっしやる。(老女)

○シゴンチウチニ ゴザル ノー。

四、五日うちにいらっしやるねえ。(中男→同)

○ゴザル コタ ゴザル フーダ ワナ。

いらっしやることはいらっしやる様子だわね。(老男)

このようにもちいられている。

「来る」の意義の「ゴザル」で、特に頻用される活用形は、運用形と命令形とである。運用形は、完了の助動詞「タ」を伴って、「完了態」としてもちいられることが多い。例えば、

○ヤー。ゴザッタ カノ。

やあ。いらっしやったかね。(老男)

○ボンデ ゴザッタ カノ。

益でいらっしやったかね。(中女→同)

○ソネーナ コトー シラベニ ゴザッタ カ。

そんなことを調べにいらっしやったか。(青女→中男)

○シニーブツノ ケンキニューニ ゴザッタ チロー。

生物の研究にいらっしやったつて。(青男)

○セツカク ゴザッタニ ノー。 ナニゴトモ ナー。

せっかくだいらっしやったのにねえ。なんのおもてなしもない。(中女)

このような状態である。

命令形は、

○ドーゾ ハヤ ムカエガ ゴザレ……。

どうぞ早く八休のV迎えがいらっしやい……。 (老女)

このように、「ゴザレ」がまれに老人にきかれるが、だいたい、次のように、「ゴザイ」としてもちいられるのが普通である。

○ルスナラ マタ ゴザイ。

留守ならまたいらっしやい。(老女→中女)

○ハナシー ゴザイ ゴザイ イッタテテ コンダケ。

話しにいらっしやい、いらっしやいといつても来ないから。

(中女→中男)

○シエンシエー、コッチー ゴザイ。

先生、こちらへいらっしやい。(小男→先生)

○オモシエレーケー ゴザイ ノ。

おもしろいからいらっしやいね。(老男)

○イツデモ ゴザイ。 カミ イッテ ゴスケー。

いつでもいらっしやい。髪を結ってあげるから。(中女→老女)

「ゴザル」は中年層以上、それも、主として老年層におこなわれることの多いことばだということはすでに述べたが「ゴザレ」から「ゴザイ」と変形した命令形は、他の諸活用形とは交って、広く、各世代を通じておこなわれているのである。しかも、一段と活動が活潑である。注目すべきことである。

「ゴザレ」が「ゴザイ」と変形したということは、相手に命令するという心づかいが、何ほどか関係していたとみられよう。ところが、「ゴザイ」となってみると、「ゴザレ」のもっているほどの古風さがない。これが土地人の、現代的な言語感情にうけて、新しい生命を獲得したのだと思われる。

形が變つて翻用されてくるとともに、心もちのこめかたも變つてくる。現行の「ゴザイ」は、だいたい、軽くて気やすいことばだと見える。

○マタ ゴザイ ヤー。

またいらっしやいね。(老女↓小男)

○ホント ゴザイ ヤ。 マッチロッケン ノー。

ほんとういらっしやいね。待つてるからねえ。(小女↓同)

これなどは、「ヤ」文末調に統轄されることによつて、いつそややすく親しみ深い命令表現にしたたられているのである。下品でもなく、そうかといつてかくばつてもいない、適度の敬意をもつ「ゴザイ」は、いわば、日常の命令表現のための便利なことばとして、広く、各世代を通じて愛用されるに至つたものと思われる。

### 三

「ゴザル」は、右にみた用法のほかに、補助的用法も発達している。

(1) 「居る」の意義の「ゴザル」が、動詞連用形をうけた「て」に続いて、補助的にもちいられる場合がある。

○アリヤト ナンニモ カンニモ シツテ ゴザル。

あの人は何もかも知つていらっしやる。(老女)

○アリヤト イキテ ゴザル。

あの人は戦争へV行つていらっしやる。(中男)

○ア、ル ス シテ ゴザルダケ ノー。

ああ、留守していらっしやるからねえ。(青女↓中男)

○オレガ ソゲ イッタケ ヨロコンデ ゴザッタ。

ぼくがそういつたから喜んでいらっしやった。(青男↓老男)

このようにもちいられ、日常、よくおこなわれる。

(2) 「居る」の意義の「ゴザル」は、また、次のような自由な承接をみせて、補助的にもちいられている。

○ドゲ・ショー ゴザル カ。

どうしていらっしやるか。(中女↓同)

○アベンシエンシーガ ゴザッタテ ハナショー ゴザッタケ。

安部先生がいらっしやったといつて話していらっしやったから。(老男)

これらは、動作の進行状態をあらわす「ショーリ」「ハナショーリ」の變じた形である「ショー」「ハナショー」に「ゴザル」が直接して、補助的役わりを果しているものである。このような自由な承接をみせるいいかたは、当方言にも強くない。が、特殊ともされる自由な用法をみせているといふことは、「ゴザル」の、当方言における生きかたの強さを示すものとして注目されよう。

(3) 「有る」の意義の「ゴザル」が、体言をうけた「で」に続いて、補助的にもちいられる場合がある。

○サカサマニ ナツテ アワレナ コトデ ゴザル。

△子供がVさかさまになつて△生れてVあわれなことです。(老男)

○ドコガ ヤドデ ゴザル。

どこが宿です。(老女)

○イマノ モノワ ラクナ コトデ ゴザル ワー。

今の者は楽なことですわ。(老男)

○マー、エンバナ トコデ ゴザッタ ナー。

まあ、折悪いところでございましたねえ。(老女)

このようないかたのものも、日常、よくおこなわれている。

(4) 「有る」の意義の「ゴザル」は、また、形容詞・形容動詞をもうけて、補助的にもちいられる。

○スズシユー ゴザル デヤ。ワリアイ ナー。

涼しうございますよ。わりあいねえ。(老女)

○イツガシ ゴザルニ ゴクローデ ゴザル ナー。

忙しうございますのに御苦労でございますねえ。(老男)

これらは「ゴザル」が形容詞をうけた例である。形容動詞をうけた例としては、

○ハー、マレニ ゴザル ダー。

はい、まれでございますよ。(老女)

○ドザナ カイー。マメニ ゴザル カ。

どうかね。元気ですか。(中男・同)

などがある。「ゴザル」に先立つ形容動詞の運用形は、「マレニ」「マメニ」のように、すべて「ニ」語尾をとる点が注目される。

以上は「ゴザル」のいかたをみてきたのであるが、一方、五箇方言には、「ゴザンス」といういいかたがさかんである。「ゴザンス」は、「ゴザル」が「マス」と結託したものに原形を求め得るだけあって、「ゴザル」よりはいつそうていねいないかたである。これも、概して、中年層以上のことばということができるが、「ゴザル」に比較すると使用度も高く、中・青年層の支持もやや厚くなっているようである。

「ゴザンス」は、「ゴザル」の場合と同様に、「居る・有る・来る」の三種の意義でもっておこなわれている。

(1) 「居る」の意義の「ゴザンス」をみよう。

○カンスシサンガ ゴザンス ワナ。

神主さんがいらっしやいますわね。(老女)

○マダ コッチニ ゴザンシタ カネ。

まだこちらにいらっしやいましたかね。(中女)

○イッシュエーカンドマー ゴザンシヨッターケー。

一週間くらいはいらっしやっていましたから。(中男)

○ボンマデ ゴザンセ、ノ。

盆までいらっしやいませね。(老女)

このようにもちいられ、日常、よくおこなわれている。

(2) 「有る」の意義の「ゴザンス」をみよう。これも、用法は、「ゴザル」の場合に準じてみることが出来る。

○ナンドモ カンデモ ゴザンス。

何でもかんでもあります。(老男)

○ソニダニヨッテ フシギナ コトモ ゴザンス、ワナ。

それだからふしぎなこともありすわね。(老女)

○バテシエキデ コシラエタ ハーチャガ ゴザンシタ。

馬蹄石で作った砲丁がありました。(老男)

このようないかたがよくおこなわれる一方、また、次のような「否定態」もさかんにおこなわれる。

○ハナデ キタナエーワ ゴザンシエヌ、ワ。

花できたないのはありませんわ。(老男)

○ナカナカ ナマナ コンデチャー ゴザンヘヌ、ワナ。

なかなか容易なことではありませんわね。(老女)

○ヒノキワ コツチニヤ、ゴザンヘヌ、ワ。

楡はこちらにはありませんわ。(老男)

打消の助動詞をとる「ゴザンス」の未然形の語尾は、右の例の「ゴザンシエヌ」あるいは「ゴザンヘヌ」のように、[e]、[h]両様にあらわれるのが普通である。また、「ゴザンヘ」(シエヌ)と「ういいかたのものは、まれに、

○アイテガ ゴザンヘナー。

相手がありませんわ。(中男)

のように、「ヌ」と文末詞「ワ」が融合することがある。

否定の表現にかかわるものとして、

○ムカシワ ゴザンシロー コター。

昔はありましようことか。ありません。(老女)

○デントーダエ ナンダエ、ゴザンシロー コト。

電燈とかなんとかありましようことか。ありません。(老女)

このようなものがとりあげられる。これらの例は、未然形が述部にあって、「コト」あるいは「コター」という文末詞に統轄され、反語的な、一種の否定表現にしたてられたものである。

(3) 「来る」の意義の「ゴザンス」をみよう。「ゴザンス」が「来る」の意義でもおこなわれることは注目に値する。

○ビッシリ サカナー ウリト ゴザンスケー、ノ。

いつも魚を売りにいらっしやいますからねえ。(老女)

○チロード エートキ、ゴザンシター。

ちょうどいいときいらっしやいました。(老男)

○ナントシテ、マー オマエ ココマデ、ゴザンシタヤラ。

どうしてまあ、あなた、ここまでいらっしやいましたの

やら。(老女)

○テット ヤスミー ゴザンスリヤー、エニ。

少し休みにいらっしやればいいのに。(老女→中男)

○キョネンモ ゴザンシエザッタ。コトシモ、ノ。

去年もいらっしやいませでした。今年もねえ。(老女→

中女)

このようにもちいられている。

「ゴザル」の場合と同様に、命令形などは使用度が高い。命令形は次のようにもちいられる。

○マタ、チロコチロコ、ゴザンシエ。

また、ちよこちよこいらっしやいませ。(老女→中女)

○シエンシエー、アツケリヤ ニカイエ ゴザンシエノ。

ニカイワ スズシケー。

先生、暑ければ二階へいらっしやいませね。二階は涼しいから。(中女)

○マタ ゴザンシエヤ。

またいらっしやいませよ。(老女)

命令形は使用度が高いといつても、「ゴザル」の命令形「ゴザイ」に比較するとかなり低い。しかも、「ゴザイ」が、広く各世代におこなわれ、親愛度の深い気楽ないいかたであるのに対して、「ゴザンシエ」は、他の活用形と同様に、主として中・老年層におこなわれ、改まった感じの強いいかたである。

## 五

「ゴザンス」も、右にみた用法のほかに、補助的用法が発達している。

(1) 「ゴザル」の場合と同様、「居る」の意義の「ゴザンス」が、動詞連用形をうけた「て」に続いて、補助的にもちいられる場合がある。

○コロエ ヒロシマカラ キテ ゴザンス。

ここへ広島から来ていらっしやいます。(中女)

○ソントー モツテ、ゴザンス カ。

弁当をもつていらっしやいますか。(老男)

○トテモ ヨーシツテ ゴザンス ワナ。

とてもよく知っていらっしやいますね。(老女)

このようにもちいられている。

(2) 「有る」の意義の「ゴザンス」が、前項同様、動詞連用形をうけた「て」に続いて、補助的にもちいられる場合がある。

○キクワイガ トツチ ケテ ゴザンス。

器械がもつてきてあります。(老女)

○カツヤマサンガ イワツテ ゴザンス ダ。

勝山さん〔神名〕が祭つてありますよ。(中男)

○ソレニ ジオ カイテ ゴザンシタ ワナ。

それに字を書いてありましたわね。(老男)

このような「ゴザンス」は、ていねい語の「マス」の後にもちいられることがある。

○フジユーナ メニ アイマシテ ゴザンス。

不自由なめにありました。(老女)

○サザエワ ソ マエノ コト オモヤー マレニ ナリマシテ ゴザンス。

さざえは、ほんとに、以前のことを思えば少なくなりまして。(老女)

これらは注目される用法である。「マス」のみでは盛りつくせないていねい意識を「ゴザンス」に托しこんだもので、いわば、つつましい方言人の心意をあらわした表現法である。

「ゴザンス」は、また、次の例のように、「シャンス・サッシュャンス」あるいは、「シャル・サッシュャル」「シ・サシ」「シシャル・サッシュャル」の連用形の転訛形(の)後にもちいられるが、

これも右に述べたところにあわせてみる事ができよう。

○ソノ フトワ シナシヤンシテ ゴザンス。

その人は死なれました。(老女)

○ナカヤサンカラ クバラシテ ゴザンスニ ノー。

中屋さんからお配りなさいましたがねえ。(老女)

○オキサシテ ゴザンス カノ。

おめざめでございますかね。(老男)

ここで、改めて注意されることは、例えば、「一マシテ ゴザンス」というように、「マス」が「て」をとったものに「ゴザンス」が続いているということである。この種の「て」は、一方では、『オッテチャロ カイ。おうちかな?』のようないわゆる「てちゃ」敬語法として、方言の敬意表現のうえで一つの役わりをになつてゐるということが、藤原亨一先生によつて注意されている(日本方言学・文法二六二―五ページ)。こうした「て」は、いわば客観的な措定性をもつことから、敬意表現のうえで注目すべき役わりを果しているわけであらう。すでにみた「動詞運用形十ゴザル・ゴザンス」も同様であるが、ここにとりあげている「一マシテ ゴザンス」などにも、右の、敬語法に関連した「て」の機能を認めることが容易である。「て」が一つの転回点となつて敬意表現が成立しているのである。

○バカナ コト シローツテ ゴザンス ワナ。

ばかなことをしていましたわね。(老女)

○ヒニ ノクメチロツテ ツケマシローツテ ゴザンス。

火にあたためておいてつけていました。(老男)

○タカイ トコニ ツムニ コマリローツテ ゴザンスガ

1。

高いところに積むのに困っていましたがねえ。(老女)

○ゲタデ イキョーツテ ゴザンス。

下駄をはいて行っていました。(老女)

これらも右の場合と同様、「て」を転回点として敬意表現が成立しているものとみることができよう。

(3) 「有る」の意義の「ゴザンス」は、「ゴザル」の場合と同様、体言をうけた「で」に続いて、補助的にもちいられる場合がある。

○ニローバガミサンデ ゴザンスケニ。

女神様でございますから。(老女)

○オツカレデ ゴザンシタ。

お疲れでございました。(青男)

このようないいかたのものは、日常、よくきかれる。右の用法に関連するものとして、次のものがあげられる。

○モー タニ カカルマデ ヤリョーツタデ ゴザンス。

もう田仕事にとりかかるまでやっていました。(老男)

○フカッタ ウラー ツキョーツタデ ゴザンス。

光った票をつけていましたわね。(老女)

○ソノ フニ カエリローツタデ ゴザンス。

その日に帰っていました。(老女)

○ワレワレ ニゲル コトバツカー カンガエチヨツタデ ゴザンス。

自分自分、逃げることはかり考えていました。(老女)

これらは、「ヤリコーッタ」とか「ツキコーッタ」とかのような、いわゆる「過去態」をうけた「で」に「ゴザンス」が縮くいかたである。承接の自在さに注目されるが、これも、先述の「体言十で＋ゴザンス」に準じてみることが許されようか。

(4) 「有る」の意義の「ゴザンス」は、「ゴザル」の場合と同様、形容詞・形容動詞をうけて、補助的にももちいられる。

○ソリヤー オモシロー ゴザンス ワナ。

それはおもしろうございますわね。(中男)

○アツー ゴザンシテ ノー。 ヒサシニュー ゴザンシタ。

暑うございましてねえ。ひさしぶりでございました。(老女↓同)

これは形容詞をうけた例である。形容動詞をうけた例としては次のようなものがある。

○チョット オマエ ミサシテモ ケッコニ ゴザンシヨー  
ガ。

ちょっとあなた、ごらんになってもきれいでございましてうがね。(老男)

○タイゲン ゴザンシヨー ワナ ノー。

おっくうでございましてうねえ。(中女↓青女)

○ムナモトガ タシカニ、ゴザンスケ ノー。

頭がしっかりしていませんからねえ。(老男)

「ゴザル」の場合と同様、「ゴザンス」に先だつ形容動詞の連用形は、すべて「ニ」語尾をとっていて注目される。

六

当方言には、「ございます」から転訛したものととして、前項でみた「ゴザンス」のほかに、「ゴワンス」「ゴワス」がおこなわれている。

○ツノガ コゲテ トブ コトガ ゴワンスケ ノー。

△牛のV角が折れてとぶことがありますからねえ。(老男)

男)

○ナニゴトモ ゴワンヘス、ノー。

何のおもてなしもありませんねえ。(老男)

○テラワ ハヤシニ ナツテ ゴワンヘザッタケー。

寺は廢止になってありませんでしたから。(老男)

また、

○コドモガ エット ゴワスケー。

、子供がたくさんありますから。(老男)

○フタイノ フロガッタト ヨッタガ ゴワスケー ノー。

額の広かったのと窄ったのがありますからねえ。(老男)

このようにもちいられる。「ゴワンス」「ゴワス」は「有る」の意義でしかおこなわれない。概して老人男子のことばである。補助的にももちいられるが、総じて使用度は低いようである。

七

以上、五箇方言の「ゴザル」およびその転訛形についてみてきた。「ゴザル」「ゴザンス」は、「居る・有る・来る」三種の意義の

ことばとして高位の敬意をもち、さかんな活動力をみせている。これを、「島後」南部の西郷地区における「ゴザル」などの存立状態と比較してみよう。

西郷地区でも、「ゴザル」および「ゴザンス」など、中年層以上にはかなりおこなわれている。が、五箇方言のその示すような優劣さはないといつてよい。五箇出身で、現在、西郷所在の隠岐高校に教鞭をとっていられる安部勝氏も、この事実を認めていられる。

西郷地区でも「居る・有る・来る」の三種の意義でおこなわれているが、そのうち、だいたい、「有る」の意義でおこなわれることが多いように観察される。五箇方言におけるおこなわれさまに比して、注目されることの一つである。

西郷地区の老人男子は「ゴワンス」をもちいることが多い。「ゴワンス」は五箇方言でも観察されたが、その存在は弱かった。対して、西郷地区ではかなりきかれる。

○コノ キンネンワ ゴワンヘンダエド シェンソージブワ  
ゴワンスダ。

男) この近年はありませんが、戦争当時はありました。(老)

○ヒヤクシローデモ イキゴンデ ヤルコカ ショーガ ゴワ  
ンヘン。

百姓でも意気こんでやるよりほかにしようがありません。

(老男)

あるいは、

○ウミノ ハタデ ゴワンス。

海のそばです。(老男)

○ンマー トレテモ コマー ゴワンス。

今は人魚はVとれても小さうございます。(老男)

このような状態である。「ゴワンス」は、「有る」の意義でしかおこなわれないことは五箇方言の場合と同様である。

西郷地区の「ゴザル」は、五箇方言の「ゴザル」に比較して、いくらか敬意が低いようである。日常、土地人同士のあいだで交される、軽くて親しみ深いもののように思われる。

ところで、西郷地区では、高い敬意を托すいいかたの一つとして、

○ヤーヤー、ゴザラッサンシタ カノ。

やあやあ、いらっしやいましたかね。

のような「ゴザラッサンシタ」あるいは「ゴザラマシャル」がおこなわれている。五箇方言でも、

○ソノ オクニ オジガミサンガ ゴザラッサナル。

その奥に氏神様がいらっしやる。(老男)

のようなものが一、二観察されたが、この種のいいかたはほとんどおこなわれないといつてよい。五箇人も、「ゴザラッサナル」などの存在を否定する。対して、西郷地区では、この種のいいかたがおこなわれている。このことは、先述したように、西郷地区の「ゴザル」の敬意が低下したことによる現象であろう。敬意の低下した「ゴザル」を補強しようとして、「シャル」あるいは「ッサンヌ」

が結合したとみられる。一方、五箇方言の「ゴザル」は比較的敬意が高くて、その種の補強の必要がないのであろう。

「島後」の南端に位置する西郷町は、隠岐の政治・経済・文化の中心地である。他地区に比して、西郷地区のことが新化しやすいのは当然のことであろう。先述した西郷地区の「ゴザル」のみせた諸現象は、五箇方言における「ゴザル」の存立状態に比較してみて、衰微の傾向を示すものとしてよい。いわば、言語新化の波をうけて、古態としての「ゴザル」が影をうすめているのである。

西郷地区の反対側、北部に位置する五箇地区は、西郷地区に比較

して古態を残しがちである。五箇方言の「ゴザル」に、なおさかなな生命力を認めることのできるわけである。しかし、これが、概して中年層以上におこなわれることの多いことばであることは注意を要する。このことは、どの程度にか、若い世代の言語感情にそぐわなくなりつつある事情を物語るものと思われる。

本稿は藤原与一先生の御指導を賜ったものであります。あつく御礼申しあげます。

— 広島大学大学院学生 —